

<特集 日本研究の過去・現在・未来>人文学としての 日本研究をめぐる断想

著者	将基面 貴巳
雑誌名	日本研究
巻	55
ページ	63-72
発行年	2017-05-31
その他の言語のタイトル	Thoughts on Japanese Studies as a Discipline in the Humanities
URL	http://doi.org/10.15055/00006576

人文学としての日本研究をめぐる断想

将基面貴已

仮に「日本研究」を「日本に関する人文社会科学的研究」とごく大雑把に定義する場合、「日本研究」の現状を検討し、その未来像を問うには、欧米の大学研究・教育において広く認識されている問題、いわゆる「人文学の危機」(the crisis of the humanities)という問題を避けて通るわけにはゆかないであろう。欧米各国や日本でも「人文学の危機」が論じられているが、その内実は必ずしも同一ではないようである。この問題は、周知のように、現代日本では、「文系学部廃止」の危機として一般に受け止められている。二〇一五年六月に文科省が公にした「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」という通知を受けて、メディアが一斉に、政府が文系学部を廃止しようとしていると報じたことで、多くの人々の関心を集めるところとなった¹⁾。一方、イギリスで問題視されているのは、

人文学の研究や教育には、政府が経済的負担を負わねばならないほどの公共的価値がないとする主張が強力になりつつある風潮である²⁾。他方、アメリカでは、人文学への政府からの風当たりが強くなったとか、学生数の減少傾向が必ずしも見られるわけではないが、その代わり、終身雇用契約(テニユア)の教職員のポジションが減少傾向にあり、テニユアを持たない短期契約の教職員が特に人文学で増大する傾向にあるという³⁾。

私が勤務するオタゴ大学をはじめ、ニュージーランドの諸大学の人文学系学部・学科は、程度の差こそあれ、ここ数年で顕著になった履修者数の減少に伴う収入の激減に呻吟している。もともと人文学系の諸学科は、自然科学系が高額の設備投資などを要するのと対照的に、研究活動のために多額の資金を必要としない。さらに、医

学的基礎研究が製薬会社などのビジネスに直結することに典型的に見られるように、産学協同プロジェクトが自然科学では広く見受けられるのと異なり、人文学系の研究業績は、収益率の高い商品化の可能性が極めて限られているため、産業界から多額の出資を受けることもほとんどない。したがって、ニュージーランドの大学の場合、人文学系の学科は、自然科学系の学科にくらべて、財政的に、学生が支払う授業料に依存する割合が大きい。このことは裏返せば、学生数の減少が人文学系諸学科の財政に与える損害は深刻なものとなりやすいことを意味する。

しかし、そもそも、なぜ人文学系の学生が減少しつつあるのか。この「病状」に関して、ニュージーランドの大学における「診断書」はほぼ同一といつてよい。すなわち、ネオ・リベラル的な経済至上主義的言説が幅を利かせている結果、国民経済に直接的に貢献しない学問は社会が必要としないかのような見解が、メディアで喧伝されるようになったからだ、というのがそれである。ひいては、人文学系の学問はビジネスの現場はおろか、就職に際しても「役に立たない」というのである。この点では、ニュージーランドの状況は決してユニークではない。英米や日本でもそうした議論は大手を振って横行している印象が強い。こうした事態に直面して、そもそも大学とは何のためにあるのか、そして、人文学的研究と教育の持つ固有の価値とは何なのか、というテーマをめぐって、英米やわが

国で書籍が次々と刊行されつつある様子は、汗牛充棟ただならぬものがある。

ただ、こうした著作にはほぼ共通して見られるのは、ネオ・リベリズムの席卷に対する批判であり、また、人文学研究と教育の自己弁護である。そうした観点に私も基本的に同意する者であるが、その一方で、人文学研究と教育のあり方それ自体に自己批判の眼差しを向ける例がほとんどない現状を、私はいささか訝しく思っている。人文学が直面する苦境を、他人のせいにすることはたやすい。しかし、ことによると、人文学研究と教育のあり方それ自体にも、問題の一端があるのではないか、と考えることもあながち無駄とは言えないのではなからうか。自己満足 (complacency) とは、他者には明々白々でありながら自分自らはなかなか認識できない問題点のひとつであらう。

以下の論述では、このように、いわば一步退いた地点から「日本研究」のあり方について考えてみたい。すなわち、人文学一般の現状に関して、いつたいどのような問題点を指摘できるかを考えることで、日本研究に携わる研究者が陥りかねない落とし穴を見出したと考える。そのような大上段の構えを取るのには、そもそも私が「日本研究」を主専攻とする者ではないからである。私の専門は中世ヨーロッパ政治思想史である。近代日本思想史の領域でも論考を発表してきているが、その分野においてフォーマルな学問的トレー

ニングを積んだ経験はない。しかも、私は日本国内の大学に勤務した経験もない。このように二重の意味で、私は「日本研究」に対してアウトサイダーの視点を取らざるをえない。したがって、「日本研究」プロパーではなく現代の人文学一般について指摘しうる問題点に光をあてることにより、「日本研究」の今後について考えてみたい。

ただし、「人文学一般」といつても、私の学問的背景および能力からしても、以下で取り上げる素材は、主に歴史的研究に限定せざるを得ないことを一言お断りしておきたい。

*

卑近な例で恐縮であるが、私の勤務校において、教員による研究助成金申請を審査する会議を行った際、ある教授は「自分が面白いと思うから」という理由だけで研究をしてもダメだというのは困ったものだ」という一言を漏らした。研究助成金の個々の申請を検討するために、その研究がどのような専門的意義を有するのか、さらに、その専門領域に限らず隣接研究分野にとつてどのような重要性を持つのか、について討議していたなかでの発言である。ちなみに、この教授は、その専門分野で優れた業績を数多く発表し、国際的にも比較的に知名度の高い研究者である。しかし、この教授ですら、自分の研究が結局のところ、自分の個人的な好奇心を満たす

ものでさえあればよいという考えを抱いていたことに気づかされ、いささか驚かされた。

自分の研究を、つまるところ、「自分が興味を持っているから」「自分が面白いと思うから」というだけの理由で行うのであれば、それは研究が極めて「私的」(private)なものになっていることを意味する。研究は、それが公刊される限りにおいては「公的」(public)なものであると言えるが、その中身が著者の「私的」な関心事でしかないとしたら、その研究の公的な意義とは、いったい何なのだろうか。専門的研究とは、まず、その専門領域内における先行研究が未だに探求していない問題に解答を試みたり、過去に研究が試みられているものの、いまだ未解決とみなされている論点を新しい視点から取り扱ったりすることで、そのオリジナリティを主張するのが常である。しかし、そのような専門研究は、専門的である限りにおいて正当性を主張できるとしても、その専門以外の人々にとつていかなる意義を有するのか、という疑問は問うに値しないだろうか。もっぱら「私的」な問題関心に発する「専門」研究は、現代の公的な問題とどのような関係にあるのか。それとも、現代文化や社会の抱える問題とは無関係であるとみなされてもよいのだろうか。しかし、それでは、学問を職業としない人々からすれば、単なる「暇人の道楽」とさえ見えてしまうのではないか。

人文学一般に広く見受けられる問題状況のひとつは、このよう

な「学問のプライベート化」(privatization)である、と私は考えている。人間活動の「プライベート化」という問題は、現代日本史においては、宗教の領域において最も先鋭に現れたように思われる。戦時下、日本の軍国主義的政策に対する態度決定を迫られて、無教会キリスト教の指導者だった矢内原忠雄と塚本虎二のあいだには決定的な対比が見られた。矢内原の場合、よく知られているように、キリスト教信仰に基づく「国家の理想」、すなわち正義と平和に照らして、日本の軍国主義的政策を公の場で批判した。他方、塚本の場合、キリスト教信仰を究極的には各個人の内面における罪の自覚に還元したため、信仰はもっぱら「私的」なものとして理解された。その結果、塚本が当時の政治的問題に対してキリスト教信仰の観点から批判することはほとんどなかった⁴⁾。この例が示すように、キリスト教信仰という、性質上極めて内面的な事柄の場合でさえ、それをもっぱら私的なものに還元してしまう場合、公的な問題と切り結ぶことがなくなってしまう。「地の塩」たるべきキリスト者がいわば「味のない塩」であつてよいのか、と矢内原は問いたしたが、このような視点は、学問についても言えるのではなからうか。すなわち、「人間」一般に関わる諸問題を扱うはずの人文学的研究が、個人的な嗜好の問題に還元されてしまうことで、我々の生きる時代の政治・経済、社会と文化にとってどのような意義を主張できるかについて説明しない(あるいは、できない?)ままで、果たしてよ

いのだろうか。

蛇足と知りつつあえて付け加えるならば、ここで私が主張しようとしているのは、人文学系の研究者が専門的研究を発表する以外に、ジャーナリズムでも積極的に発言すべきだというような皮相的なことではない。いうまでもなく、研究者の自分は専門的研究をおこなうことにあり、研究者は最終的には、学問の世界で勝負すべきである。しかし、問題は、ある専門的研究が、その暗黙の前提として、現代の諸問題といかなる意味においても無関係なままにとどまってもよいのか、という点にある。

やや一般的にこの論点を言い換えれば、人文学の領域における専門的研究とはそもそもいかなる目的に資するものなのか、ということに帰着する。

「人文文学は役に立たない」という批判に直面して、英米の人文学系の研究者たちは、「人文文学こそが政治を含む公的問題について批判的思考を養う」とか、「デモクラシーを健全に運営するために必要な素養だ」ということを、口を揃えて主張している⁵⁾。この点、吉見俊哉は、興味深い視点を最近の著作で示している。吉見によれば、十九世紀末から二十世紀にかけての人文文学に共通する問題とは「価値とは何か」という問いだった。ヨーロッパ世界における世俗化、すなわち、神が価値の絶対的源泉ではなくなり、価値が多様化・相対化したことが、近代社会における人文文学のあり方を決定した、ひ

とつの大きな背景をなしているという。つまり、現代の人文文学は「複数的で流動的な「価値」を問い、観察し、分析し、批判し、創造していく視座や方法として、十九世紀から二十世紀にかけて形成されてきたものだ」というわけである^⑥。このように考えるならば、社会を支える価値を疑い、問い直し、新たに創造することこそが人文文学のひとつの大きな目的であり、課題であることになる。

人文学の知的活動が、つまるところ「価値」の探求であるという吉見の主張が妥当であるとしても、そのことは即、個々の研究者の専門的研究のひとつひとつを正当化するものではない。専門的個別研究がいかに現代社会の「価値」に関わる問題と結びついているか、個々の研究者がその「価値」の問題に自覚的かどうかは、吉見が指摘するような人文学一般に妥当するはずの目的とは別問題である。さらに言えば、研究の「プライベート化」こそは、そうした人文学一般の目的とは正反対に、本来、公の場で問うことで初めて重大な意義を有するはずの「価値」という問題に背を向ける態度であるように思われる。

そもそも、近代社会は、政治・経済、社会や科学、芸術など多様な人間活動分野がそれぞれ自立・自律化することに一大特徴があるという意味では、研究者は、もっぱら学問的専門分野 (discipline) それ自体の発展のために学問を追求しさえすればそれでよい、という考え方もありうるだろう。そのような視点は、自分が勤める企業

の発展（ひいては自分のキャリア）のためだけにビジネスに勤しめばそれでよいではないか、というビジネスマンやビジネスウーマンのそれと似ている。しかし、一企業も国内・国際社会の一部であるかぎり、その企業活動は、ただ単に営利を最大化するにとどまらず、その企業が生み出す製品やサービスを通じて、国内外の社会・文化生活に望ましい貢献をし、その営利活動の結果生み出された富も、関連財団の活動や公的施設への寄付などのかたちで、社会に還元されることを期待されるはずである。それと同様に、学問も、学問的な真理の探究と、そうした活動を主に支える大学の活動を通じて、国内外の社会に対して、学問が果たしている固有の仕方^⑦で貢献すること（経済的貢献だけではない）が期待されるはずではなからうか。このように論じることによって私が念頭に置いているのは、当然のことながら、人文学系の研究者が、政治・経済権力に奉仕する存在になるべきだということではない。むしろ、真理の探究という学問的精神の根幹こそは、市民社会における良心、批判精神の担い手としての役割を大学に負わせるものではなからうか。

*

このように、学問（特に人文学的研究）の「プライベート化」をめぐる論じうる問題は多岐にわたるが、それら諸問題の奥底に横たわっているのは、人文学的知識の断片化という状況ではないかと

思われる。ポスト・モダニズムによるグランド・セオリーの解体という事態が出現した二十世紀中葉よりもさらに遡って、十九世紀に台頭した歴史主義がもたらした「弊害」について、ニーチェが鋭く批判したことは広く知られている。⁷⁾ いうまでもなく歴史主義こそは人類史上にみられる個別事象の個性的理解の重要性を説いた思想である。歴史主義は、今日論じられることは必ずしも多くないが、決して消滅したのではない、とドイツ哲学研究者フレデリック・バイザーは主張している。すなわち、歴史主義があまりにも巨大な成功を収めた結果、あらゆる人々が歴史主義者となったために、歴史主義という思潮それ自体がもはや自覚されることがなくなった、⁸⁾ いうのである。歴史主義へのコミットメントは、歴史を貫徹する一般的な法則や本質主義への批判を意味し、一切の歴史的事象を一回限りのものと見なすとともに、歴史上存在したありとあらゆる価値を相対化する。次々と飽くことなく歴史的知識を生み出す「学者」を、ニーチェは、「つかまれるとしかたなしに埃を立てる粉袋」である⁹⁾と『ツアラトウストラ』の中で諧謔的に表現している。

ところが、歴史主義的な思考の淵源は、法政思想史研究者のコンスタンティン・ファゾールトによれば、さらに中世末期にまで遡るといふ。ローマ教皇や神聖ローマ皇帝の普遍的支配に対抗して諸王国や都市国家がその自立性を主張する際に思想的に選び取った手段は、教皇・皇帝の普遍的支配の主張を支える歴史観を解体する

ことだった。普遍的支配の正当化原理としての歴史観は、いかなれば時代錯誤的な史料（聖書やローマ法など）の読解に基づいていた。そうした時代錯誤を、ダンテ、マルシリウス、オッカムなど十四世紀を代表する思想家たちは、歴史的観点から次々と批判した。つづく十五世紀には、教皇がその権力基盤の正当性を主張する上で一役買った文書「コンスタンティヌスの寄進」が実は偽作であることを、ロレンツォ・ヴァッラやニコラウス・クザーヌスが歴史的に明らかにした。このようにして台頭した歴史的なアプローチは、しかし、正確な歴史的知識の獲得それ自体を目的とするものではなく、むしろ普遍的支配の解体という政治的目的に奉仕する「理論」として位置づけられるものであった。ところが、ファゾールトが指摘するように、近代初期において、聖俗両界における普遍的支配が根底から掘り崩されてしまった後では、歴史的知識の探究は、従来の政治的目的から切り離されて自己運動を始めた。その結果、過去の探究それ自体が自己目的化し、歴史的探究は前世代によって生み出された歴史的知識の絶えざる改訂作業となった、¹⁰⁾ いうのである。

そうして誕生した歴史学は、ファゾールトによれば、いかに正確な歴史的知識の追求を標榜しようとも、全く純粋無垢なものではないという。十四世紀以来の歴史的アプローチに共通するのは、証拠として用いられる史料が、自由に意志し行為する、ある個人によって生み出されたものである、という暗黙の前提である。それは裏を

返せば、現存する史料は、たとえば、人間の自由な行為の結果ではなく神の摂理のゆえに存在する、というような説明を無効であるとして最初から退けることを意味する。つまり、歴史を説明する上での暗黙の前提とは、人間の自由な自律性を承認して疑わないことである。ある歴史事象を理解するには、その事象をコンテクストに据えなければならぬというのは、歴史学のいわば「公理」（あるいは「陳腐な常套句」）か）であるが、その原則を「公理」として承認することは、その前提にある、人間の自由な自律性への確信（あるいはフアゾールトによれば「信仰」*belief*）を表明し、それに対するあらゆる疑念（例えば、神の摂理によつて歴史を説明しようとする立場）を排除することにはかならない。⁽¹¹⁾

このような、歴史的思考の根底に横たわる人間の自由への確信は、日本では、中世ヨーロッパ史家の上原専祿（一八九九—一九七五年）が、すでに戦後間もなく、明確に主張していたことである。その著書『歴史学序説』において曰く、

ある生活現実が生じたというのは、無意識のうちにそうなったのでもなく、機械的にそうなったのでもない。また、どうにでもなりうるものが、偶然にそうなったのでもなければ、いつの場合でもそうなのだから、この場合にもそうなのでもない。そうではなくて、ある生活現実が生じたのは、きわめて具体的な

条件の下で、意識的、意志的な行為の結果として、それより他のものは生じえないぎりぎりの産物として、そうなったのである。こうした、その時々における意識と意志の、自由と決断の所産として、生活現実の生成を理解することが、一回性において生活現実をとらえるということの少なくとも一つの意味だろう。……歴史学そのものは、人間の生活現実⁽¹²⁾に法則性があるという主張を、肯定するものでもなければ、否定するものでもない。そうした主張そのものをも歴史的なもの、個性的なものとして観念するほどの自由の意識において、あらゆる生活現実に迫ろうとするのが、歴史学的認識の意志だ、といえよう。（一部引用者による強調を付加）

歴史的認識がそのようなものであるならば、バラバラで一回的な事象に関する歴史的な知識とは、歴史研究者を取り巻く社会一般にとつてどのような「意義や効用」があるのか、と上原は、続けて問題提起している。まさしくそれこそは、本編冒頭において私が掲げた問いであるが、歴史主義という思想的コンテクストを考慮するならば、この問題はいつそう深刻である。なぜなら、歴史的対象が全て一回きりでありユニークな存在であるなら、すでに過ぎ去つて二度と戻らない過去についての知識には、単なる興味本位や骨董趣味以上のどのような意義を主張しうるか、明らかではないからである。

上原はこの難問に答えて言う。歴史とは「研究者の問題意識や生活意識を出発点として、無数の生活現実の中から知る値打ちがある」と想定されたものを選び取り、それを一つの歴史像へと創造的に構成してゆくという仕方であり、とらえられるものである⁽¹³⁾。すなわち、研究者は、現代における問題を「自己の問題」として受け取り、「そのたかめられ公共化された自己の問題意識を出発点として、その意識に響いてくるところの、あるいは遠くの、あるいは近くの生活現実を一つのまとまりのある歴史像へと創造的に構成してゆく」というのである⁽¹⁴⁾。

そのような現代に問題意識の根ざした歴史研究は、「現代にとって意味のある多くの事実や問題を発見する」⁽¹⁵⁾。こうした研究上の発見が社会の共有財となれば、市民社会の側でも、もともと意識されていた問題のほかにも、歴史によつてはじめて明らかにされた新たな問題が所在することを認識したり、既存の問題意識がより磨かれ深まったりすることになる。このように、上原によれば、歴史研究は社会から問題を受け取るが、逆に社会に向けて歴史的な視点から問題を投げ返すという積極的な役割をも担うという⁽¹⁶⁾。

さらに、歴史主義的なあらゆる事象の一回性の認識を厳しく突きつめるならば、現代社会が直面する問題もまた個性的・一回的であることの認識を促す。したがって、過去に有効だった方法をそっくりそのままあてはめても、現代における問題解決に結びつく保証は

ないという自覚を促すことにもなる。このように「政治的、倫理的意志の情性化をいましめ」という意味で、歴史研究は、現代を生きる人々に「新たな責任感を課する」ものでもあるとしている⁽¹⁷⁾。

このように、歴史研究は、現代との対話を通じて、なんらかの意味において知る、価値のある、史実を提示する責務を担っている。しかし、それは、現代における諸問題に直接的に解決策を示すためではなく、むしろ過去に成功した解決策に頼ることの知的怠惰を戒め、自分の頭で考えて、現代固有の課題と対決すること、を教えるものだ、ということになる。

*

以上のような一般的考察をもとに、「日本研究」のあり方考えるならば、どのような問題点が浮上してくるだろうか。

真つ先に指摘すべきは、すべての歴史的な「日本研究」は、その研究者が現代社会に対してどのような問題意識を持っているか、という点と切り離して存在すべきではないということである。ある研究が、その専門領域の内側では知的貢献を果たしていることが自明のようであつても、その研究を現代の諸問題から無関係なままに放置する「学問のプライベート化」状態を当然のこととして肯定するならば、それは知的「引きこもり」の状態であると言えなくもないのではない。その意味で、研究者は、専門分野の研究者以外の読

者をも念頭において、彼ら専門外の読者にとつて、現代という文脈において自分の研究がいかなる意義を持ちうるか、について考えをめぐらしつつ研究をすすめる必要があるのではなからうか。

念のために付け加えれば、歴史研究を骨董趣味のような個人的嗜好の問題に貶めない必要があるからといって、現代社会における問題と切り結ぶ歴史研究を、歴史を現代における政治的論争のための道具に使う現在主義的なものとすべきだということを私は主張しているのではない。そうではなく、現代という時代において、ある歴史を研究するということは、言語行為論的に言えば、ひとつの発話行為にほかならないということの問題にしているのである。すなわち、ある歴史研究を現代において発表することにより、その歴史研究者は何をしているのか。研究の公的な意図と私的な動機に関する自覚の有無が問題なのである。

研究者自身がおかれているコンテキストとの関係で自分の研究を見つめ直すことの重要性を認識するなら、考慮すべきコンテキストは、現代社会や文化といった、一般的なものとは限らない。日本研究者自身が日本人であるか、または、外国人であるか、あるいは、研究者が日本で生活しているのか、または外国で生活するのにかによつて問題設定のあり方は異なってくるであろう。また、その研究業績を日本語で発表するか、外国語で発表するかによつて、想定される読者も異なってくるであろうし、そうなれば、その研究業績が

専門的研究として持ちうる意義を超え、意味あいも大きく異なりうるであろう。

以上の問題を大学院教育の場面にあてはめるなら、昨今、特に欧米で流行の兆しが見える傾向だが、共同研究に大学院生を組み込み、博士論文をそうした共同研究プロジェクトの一環として執筆させることは大いに問題をはらんでいるように思われる。自然科学においては研究チームを編成し分業しつつ研究を進めるのが一般的であるが、人文学においても共同研究が盛んになりつつあり、研究助成を行う諸機関もそのような方向性を支持する傾向が強まっている。しかし、人文学の場合、自然科学の場合と異なり、研究素材と方法が同一であれば同じ問題に対してどの研究者にとつても同一の解答が期待できるというようなものではない。それどころか、これまで論じてきたように、人文学の「背骨」は、個々の研究者による同時代的状況との思想的対決としての側面を有する。しかし、大学院生としての学問的トレーニングが共同研究チームの末端を担うだけに終始するなら、卒業時に学位こそ得ることはできても、そもそも自分が、自分の生きる時代との関わりにおいて、その研究を行う根本動機と意図とは何なのかを自問し、沈思黙考する機会ほとんどないままで学生時代を終えることを意味するのではないか。そうだとすれば、それは、その若い研究者個人にとつても、その研究者の専門領域にとつても、極めて不幸なことと言わざるをえない。

二十一世紀初頭という現時点において、そもそも「日本」を（歴史的）研究対象とすることの意味とは何なのか。日本研究として、その選んだテーマを探究することの意味とは何なのか。その「意味」とは、研究者個人にとつての意味であると同時に、その研究成果に接する人々にとつて持ちうる意味でもある。これらの問題を、日本研究に携わる若い人々一人ひとりが自問すること、それこそが、時代の逆風に負けず、人文学としての日本研究が今後も存立してゆくための必要条件のひとつなのではないだろうか。

注

- (1) 特に以下を参照。室井尚『文系学部解体』（角川新書、二〇一五年）、吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書、二〇一六年）。
- (2) 以下を参照。Helen Small, *The Value of Humanities* (Oxford University Press, 2013); Stefan Collini, *What Are Universities For?* (Penguin, 2012).
- (3) 以下を参照。Michael Berube and Jennifer Ruth, *The Humanities, Higher Education, and Academic Freedom: Three Necessary Arguments* (Palgrave Macmillan, 2015). また、次も参考にみる。Paul Jay, *The Humanities Crisis and the Future of Literary Studies* (Palgrave Macmillan, 2014). このポール・ジェイの作品が指摘するように「人文学の危機」は決して新しい現象ではない。たとえば、イギリスの歴史家 J・H・プラムが「人文学における危機」をテーマに論文集を編集・刊行したのは一九六四年のことである。J. H. Plumb, *Crisis in Humanities* (Penguin, 1964).
- (4) この例については以下の拙稿に詳しく。Takashi Shogimen, “Another

Patriotism in Early Showa Japan (1930-1945),” *Journal of the History of Ideas* 71.1 (2010): 139-160.

- (5) 以下の前掲書を参照。Small, *The Value of Humanities*; Berube and Ruth, *The Humanities, Higher Education, and Academic Freedom*.
- (6) 吉見『「文系学部廃止」の衝撃』一〇四頁。
- (7) この点についての文献は枚挙にいとまがないが、拙稿との関連では特に以下を参照。Peter Levine, *Nietzsche and the Modern Crisis of the Humanities* (State University of New York Press, 1995).
- (8) Frederick C. Beiser, *The German Historicist Tradition* (Oxford University Press, 2011), Introduction.
- (9) ニーチェ「ツアラトウストラ」、手塚富雄編『ニーチェ』（「世界の名著」第五七巻）（中央公論社、一九七八年）、二〇五頁。
- (10) Constantin Fasolt, “The Limits of History in Brief,” *Historically Speaking* 6.5 (2005): 5-10, とくに 7-8. この短い論文は、同じ著者による洞察力と独創性に満ちた以下の書籍のエッセンスをまとめたものである。Fasolt, *The Limits of History* (University of Chicago Press, 2004).
- (11) Fasolt, “The Limits of History in Brief,” 5-7.
- (12) 上原専祿『歴史学序説』（大明堂、一九五八年）、八二―八四頁。
- (13) 同右、八五頁。
- (14) 同右、八六頁。
- (15) 同右、八八頁。
- (16) 同右、八八―八九頁。
- (17) 同右、八九頁。